
魔王様と一緒に

ゆーりっど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様と一緒に

【コード】

N0866A

【作者名】

ゆーりっど

【あらすじ】

かつてあった旧魔王は、ガナフ・クオファイド勇者の生まれ変わりだと名乗る少女とともに現魔王を倒す旅に出る?!

00プロローグ

我が名はガナフ・クオフィード。

かつては天・地・魔・精霊界の全てを恐怖で支配していた。

誰もが我が力の前にひれ伏した。

ただ、

一人の

男を

除いては。

01 地下牢

闇が広がっていた。

唯一私に刃向かった^{テス・マクルド}勇者との勝負に敗れた私は、奴の命と引き替えにこの地に封印された。
その上から人間共が幾重にも封印を重ね、私は身動きすら許されぬ闇へと落とされた。

3

この闇は永遠に消え失せる事はない。

過去も。

現在も。

未来永劫に。

「わあ！ここにガナフ・クオフィードが居るんですねッ」

不意に響く馬鹿みたいに明るい声。

私の闇はこの瞬間にして、唐突に終わりを告げた。声の主は若い女だった。

「あの…」

「あ、案内ありがとうございます！ここから先はわたし一人で大丈夫ですから。外で待っていて下さい」

「そうですか」

案内した兵士があからさまにほっとした声を上げいそいそと引き上げていく。

「さて」

女はたいまつをやけに重たそうに抱え、階段を下り始めた。

私はたいまつで揺れる炎の眩しさに目を細めて、その光景を見ていた。

ああ。永く闇にいたから目が潰れたものだと思っていた。

「きゃわあ!」

奇妙な叫びとともに、女は足を滑らせて階段を見事に転げ落ちた。

「あたた。ひどいめにあつ…きゃあ!」

転げ落ちたのはたいまつも一緒だった。

女の服に火が移る。

「いやあ〜!燃えてるううッ」

バシバシ自身の体を叩きつけ、何とか消火に成功する。
下手をすればいきなり丸焦げになる所だった。

「ふう。びっくりしました」

汗を拭う仕草をするなり、女は何事も無かったかのようにたいまつを拾い上げる。

女は再び歩き出した。

たいまつに浮かび上がった部屋は広く殺風景なところだった。

床一面に、ぎつしりと書き込まれた魔法陣の檻。

女は封印の上を事も無げに跨いでゆく。

女、正気か？

魔法陣を跨ぐほとに、私を封印する力は弱まっていくというのに。

それでも、女はついに最後の一つですら躊躇いを見せなかった。

「お待たせしましたガナフ・クォフィードさん！」

「…なかなか、面白い物を、見せて、もらったぞ」

久しぶりに開く唇はかさつき、のどは酷く震えてしわがれた声をしていた。

「もう！からかわないで下さいよう」

ばたばた手を振り、恥ずかしさを誤魔化す。
何というか、頭の中が年中春のような女だな。

「さあ、早くここから出ましょう」

「…何を、戯けた事、を」

「あ、信用してませんね？ちゃんんと許可は貰ってますよ。さあ早く行きましょ」

02 アミレット

訳の分からぬまま外に連れ出された私は、周囲の白い目を浴びながら女の部屋にたどり着いた。

「どんどん食べて下さいね」

テーブルの上に並ぶ色とりどりに盛り付けられた皿。

人間の食事が山のように用意されており、女はさらに温めたスープを鍋ごと運んで来た。

「ずっと飲まず食わずだったから、きつとお腹が空いていると思って、たくさん用意しました！」

「ふん」

わたしは鼻で笑い、ちらりと見ただけで顔を背けた。

「愚か者め。人間と同じ物を悪魔が食せる訳がなかるう」

「そついつの、食わず嫌いって言うんですよ」

子を叱る母親の顔をして女は腰に手を当てる。

「食事だと言つのなら…」

私はおもむろに女の胸ぐらを掴み上げた。

「お前の血を捧げる！」

皿がいくつか床に落ち、スープがぶちまけられた。

不味そうな女を食らう趣味は無い。ただの脅しのつもりだった。しかし――。

ばちん！

雷が弾けるような音がし、掴み上げてた私の腕が一瞬で黒こげになる。

炭に力は無く、指先から崩れていき、女は床に放り出された。

「ガナフさん！」

服の汚れも気にせずに女は飛び起きた。

「ああ、痛そう……」

肘から下をほとんど無くした私の右腕を、女は申し訳なさそうに両手でそっと包んだ。

「ごめんなさい。わたしのアミュレットが反応してしまったみたい
です」

「ふん」

うっとうしそうに女の手を振り払い、私はおもむろに肩に手刀を入
れる。

腕はあっさりともげ落ちた。

切り口からは黒い液がしたたり、その液体は空気に触れて次々と気
化して消えゆく。

切り口そのものは黒の空洞が広がっていた。

グツと無くなった肩から先に力を込めると、新しい腕が生えた。

服はないが、焦げる前と変わらない腕がそこにある。

「うわぁ！悪魔って便利なんですね」

感心したように女は目を丸めた。

このくらいは悪魔にとっては日常茶飯事だ。

いちいちうるさい。

「でも、それはそれ。これたこれ。ガナフさん騙されたと思って一口食べてみて下さい」

女は私を椅子へと押し戻し、無理やりナイフとフォークを持たせた。

女が私に害をなすぶんにはアミュレットの反応はないらしい。

つまり、私はこの女に逆らえないわけだ。

「…ふん」

ごくつまらなそうに鼻を鳴らして両手の道具を放り捨てる。
私は幾つかあったスープの皿に空いた手を伸ばした。

汁ものであれば、不味くとも流し込めると思ったからだ。

女が固唾を呑んで私の様子を窺っている。

「人間の食事など不味いに決まって…

…美味しいな」

一口飲んだとたん、鼻にトウモロコシのの良い香りが抜け、口の中
には甘さとしょっぱさの丁度良い具合の味わいが広がった。

牛の肝よりも美味いかもしれない。

ぱあっと女が顔を輝かせる。

「やったあ！ コーンスープはわたしの得意料理の一つなんですよ。えへへ、気に入ってもらえて嬉しいです」

せつせと床を片付けながら顔をはにかませた。
どうにも、切り捨てた腕を持ちながらだと奇妙な光景となる。

「どんどん食べて下さいね。お代わりはいくらでもありますから」

人間の食事がこれほどまでに美味しいとは思わなかった。

封印される前も同じだけの料理があったとも考えにくいだが、しかし、こんな事であれば封印される前にも食べておくべきだった。

「…フン」

再び鼻を鳴らし、私は次の皿に手を伸ばした。

03 着替え

食事を終わると、女は無遠慮にもこう言い放った。

「ガナフさん、さすがに汚いですね」

それもそのはず、女の話では私はあの闇の中に二千と五百年居たというのだからな。服は風化し髪もほこりをかぶっている。

「服は用意しておきました。気に入ってくれたら嬉しいです」

皿を片づけながら、女は隣の部屋に案内した。

ここは城から与えられた個室らしく、高級ホテルのようにそこだけで生活出来るほど多くの部屋によって区切られていた。

「じゃあ、わたしは片付けがありますから」
そう言うなり、女は部屋を出ようとす。

「まて」

私は女を呼び止めた。

「はい？あ、やっぱり気に入りませんでしたか」

「そうじゃない。私を一人にしているのか」

「えーと。服の着方が分からない？」

「ぶざけているのか？」

「そ、そんなつもりはありませんけど」

「仮にも元魔王を一人にしているのかと言っている」

「何だそんな事ですか。大丈夫ですよ、ガナフさんなら。じゃあ、着替え終えたら呼んで下さい」

にっこりと女は笑って見せ、扉を閉めてしまった。

「ふん」

私を小馬鹿にしておるな、あの女は。

確かに敵意を持って攻撃を仕掛けてしまえば、アミュレットが反応を起こし、私を灰へと変えるだろう。

しかし、女と無縁の場で力を使ってしまうえば、アミュレットが反応をするとは限るまい。

窓辺に立ち、私は腕を伸ばした。魔力を集中させ、吹き飛ばすのだ。

しん。

かざした手からは何も出ず、ただ静かな空気が流れた。

かつてあった、溢れんばかりの力が感じられなかった。

ただ頭の中で魔法式を構築するという基本的作業でさえままたら無いほど集中する事が出来ない。

「く…っ。アミュレットの制約か」

あの闇を出た今もなお、勇者テス・マクルドの支配が私を縛るのか。

「…くだらない」

つまらなそうに吐き捨て、私は仕方無く女の用意した服に手をかけた。

少なくとも、このまま窓を睨んだところで何も変わりはない。

大丈夫と言ったのは、アミュレットの力を知っている事だろう。

とくん。

脈がひとつ大きくうねった。

「…？」

それが何であるか分からない。

とくん。とくん。

心臓が握り潰されるかのような不快な感覚が広まってゆく。

早鐘のごとく脈はうねりを増し、私はたまらず片足をついた。

「う…っぐあああああ！」

ひどい混乱が私を襲う。

苦しさに叫び、頭を抱えた。

部屋はしんと静まり返り、その中で私の声だけが虚しく響く。

ふっと、目の前が暗くなる。

闇が広がっていた。

私は目を見開き、駆け出した。やはり闇が消えることはなく、何処までも続いている。

一瞬見えたように思えた光は私が見た幻影だったのだろうか？
あの馬鹿みたいに明るい声も、人の食事が意外に美味しいことも全て私が見た幻に過ぎなかったのか…。

「わーん！ガナフさん死んじゃ嫌だっ！！」

「…？」

頬に当たる雫に私は起こされた。

目の奥を焼き付ける光に目を細めて、ようやくと瞼を持ち上げる。

「が、ガナフさん！！」

女は一瞬驚いた様子で私の名を呼び、飛びついて来る。

目を真っ赤に腫らし、わんわん泣きじゃくっている。

「…つう」

額が痛み頭にてをやる。

いまいち状況が飲み込めず辺りを見回すと、壊れた扉と残骸が散っていた。

「ガナフさんがいきなり叫びながら扉を突き破ったんです。壁がへこむ勢いで」

なるほど。

女が指す先を見れば、丁度、私の身長辺りの壁一部が見るからにへこんでいる。

もしかして、私は非常に情けない事をしでかしたのか？

「あ、血が…」

ポケットか白いハンカチを出し、女が私の額に当てた。
アミュレットの力を思い出して、私はその手を振り払わなかった。
ただ猛獣の如く低く唸る。

「…やめろ」

「いいえ。放っておいたら痕になります」

「腕を治したのを見たらう。もう塞がっている」

「…ですね。良かった」

ほっと女は胸をなで下ろした。

私はじっとその女を見た。

「お前は本物か？」

唐突な発言に、女は首を傾げた。まあ、妥当な反応だろう。

「あの」

私が何も言わなかったように立ち上がる時、女はボソッと
呟きかけた。

「わたしは、他の誰でも無く《わたし》としてこの世界に存在する
んです。だから本物であると信じています」

そう、女はほざく。

私は幻影や幻ではないかと問うたつもりだったが

「他の誰でも無い」
と言った。

あまりにも噛み合わない答えのように思う。

わたしはフンと鼻を鳴らした。

「もういい。どけ女。わたしは着替えをする」

いたぶるつもり無く立ち上がると、身を乗り出して私の額を拭って
いた女がひっくり返った。

「痛たたた…」

腰をさすり女は呻ぐ。

しかし、すぐに立ち上がり私の後ろについて来た。

「やっぱり着替え手伝います」

どこか心配そうに言う。

私は頭を掻いた。ホコリやフケと共に、血の固まり掛けたのが飛ぶ。私は着替えもままならない子供ではない。

「いらん」

「いえ、手伝わせて頂きます!!」

腰に手を当て叱りつける女。

全く持ってうつとおしい。

私が魔王であった頃に、ここまでしつこい侍女を持った事はない。

「…好きにしろ」

面倒くさそうに私は手を振った。

「はいっ」

女は元気良く頷いて見せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866a/>

魔王様と一緒

2010年10月21日21時25分発行